

まちに開かれたキャンパスの空間特性・利用実態と地域での役割に関する研究：
東京都区部のキャンパスを対象として

A Study on the Spatial Characteristics, Utilization, and Regional Role of Open Campuses: Focusing on University Campuses in the Tokyo 23 Wards

37-226979 DAI XINYU

This study examines the spatial characteristics, utilization, and regional role of open campuses in the Tokyo 23 Wards. Campus openness is influenced by boundary visibility and connectivity with surrounding pedestrian spaces. The research identifies key campus typologies and their impact on accessibility and community interaction. To enhance openness, three strategies are proposed: integrating campuses with surrounding areas, maintaining streetscape continuity, and developing multifunctional spaces. Additionally, open campuses contribute to urban connectivity and regional revitalization, supporting sustainable urban development.

1. はじめに

1.1 研究の背景

1) 都心回帰する大学キャンパスと地域の関係
2002年以降、日本の大学は郊外から都心部への移転・新設が進み、回帰傾向を示している。都市部の交通利便性や資源へのアクセス向上が学生の誘引要因となり、企業や自治体との連携の可能性も重要視されている。しかし、都心部では土地利用が密集し、地域住民との調整が不可欠である。そのため、キャンパスの開放や公共空間の整備が地域社会との共生を促進し、都市環境の向上に寄与すると考えられる。

2) 大学の社会貢献機能の強化

少子高齢化や情報化の進展に伴い、大学には教育・研究に加え「社会貢献」の役割が求められている。文部科学省も大学の地域貢献を推進し、都市再生の拠点としての機能強化を提唱している。特に、①公共的な空間提供、②地域再生の拠点形成、③防災機能の強化が開放型キャンパスの主要目標として挙げられる。

3) 複合機能の空間デザインと利用者の多様化

都市部の限られた土地を有効活用するため、低層部を地域に開放し、商業・文化施設を設置

する一方、高層部は教育・研究施設とする複合利用が進んでいる。また、地上部を広場・緑地とし、地下部に駐車場や物流機能を配置する多層構造が増加している。これにより、地域住民の交流促進、ヒートアイランド現象の緩和、生物多様性の保全といった都市環境への貢献が期待され、大学と都市の相互関係を強化する役割を果たしている。

1.2 研究の目的

東京における大学キャンパスは、都市環境と密接に関わり、その開放性や公共性を通じて地域社会や都市空間に重要な影響を与える。本研究では、大学キャンパスの物理的空間デザインや公共空間の利用状況を明確化し、さらに社会文化交流や政策的取り組みが大学と地域社会との関係構築にどのように寄与するかを体系的に分析する。

①東京都区部における大学キャンパスの開放性の全体像を把握する。

②公共空間の利用および開放性向上に寄与するキャンパス空間計画とデザインの特性を明らかにし、学外利用者の利用実態を通じて大学キ

キャンパスの開放空間の有効性を評価する。

③エリア全体の計画の観点から大学の開放性を向上させる方法を検討し、東京都区部の都市地域において大学キャンパスと地域社会の持続可能な関係を構築する際に大学キャンパスが果たす役割を明らかにする。

1.3 研究の構成と方法

本研究では、大学キャンパスの開放性を物理的空間と社会文化的要因の両面から分析する。

第2章では、実地調査と資料収集を通じて東京23区内の大学キャンパスを対象に開放性の全体像を明らかにする。物理的空間の観察に加え、文献・歴史・政策資料を比較分析する。

第3章では、物理的空間の分析を中心に、キャンパスおよび周辺地域の土地利用や境界部の空間構成を比較する。また、公共空間の特徴や利用状況、学外使用者の行動を整理し、開放性との関係を検討する。

第4章では、社会文化的要因の分析として、自治体の計画書や政策資料を調査し、自治体関係者へのヒアリングを通じて政策の目的・実施状況・効果を評価し、課題を特定する。最後に、実地調査・資料調査・ヒアリングの結果を統合し、空間構成と地域連携の関係を分析し、開放性向上のための具体策を総括する。

2. 東京都区部の大学キャンパスの開放状況

2.1 対象キャンパスの選定および除外基準

本研究では、令和5年度全国大学一覧を基に、東京23区内に所在する国公立大学および私立大学を研究対象とした。ただし、女子大学、芸術系大学、医歯薬系大学および特定構成の大学は対象から除外することとした。

2.2 対象キャンパスの類型化

以上の基準によって選定されたキャンパスは、キャンパスの開放性と形態に基づいて分類される。(表1&2)

表1 キャンパス形態分類

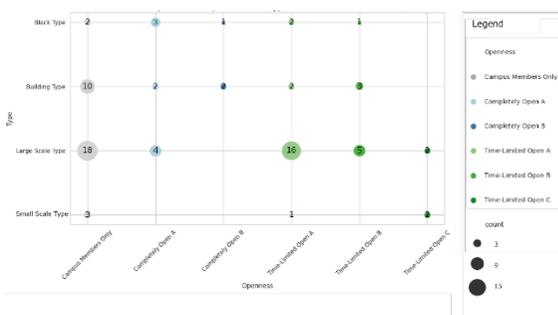
大規模型	一つまたは複数の街区にまたがる敷地を持ち、多数の建築物と公共空間が存在するキャンパス。
小規模型	一つの街区の中に複数の建築物と公共空間が存在するキャンパス。
街区型	建築物が道路の両側に点在しており、周囲と一体化しているキャンパス。

ビル型	一つの建築物(ビル)とその周辺の一部公共空間で構成されているキャンパス。
-----	--------------------------------------

表2 開放度のレベルと類型

完全開放	完全開放 A (公共空間が多い) 塀が設けられておらず、自由に入出可能であり、公共空間が広範囲に提供されている。公共空間には、活動が可能な緑地、広場、道路空間などが含まれる。
	完全開放 B (公共空間が少ない) 塀が設けられておらず、自由に入出可能であるが、公共空間の提供が限定的である。
固定時間開放	固定時間開放 A (正門および主要な入口開放、全体出入り歓迎) 開放時間内において正門が開放され、一般利用者の出入りが歓迎される形式。
	固定時間開放 B (特定建物限定) 開放時間内において特定の建物のみ利用可能とする形式。
	固定時間開放 C (公共空間が少ない) 開放時間内において公共空間の提供が極めて限定的である形式。
限定	入場には事前の申請、登録、または予約が求められ、原則として学内関係者以外の立ち入りを禁止する形式。

図1 キャンパスの開放性レベルと類型の関係



結果を見ると、都心部と近郊部の間に顕著な差異は見られず、むしろ大学側および自治体の意向の違いが開放性の差異を生み出していると考えられる。

キャンパス形態と開放性を総合的に見ると、外部に開放されるキャンパスの多くは、大規模で特定の時間帯に開放される形態をとっている。これは、歴史を持つ国立大学や一部の名門私立大学に多く見られ、塀を残しつつも比較的高い開放性を維持し、公共空間や文化・自然資源を

提供している。

また、多くの大学は地域連携の一環として博物館、庭園、カフェなどを設置し、学外者の利用を積極的に受け入れている。一方で、41.6%の大学は通常時に外部開放を行わず、事前申請や受付が必要となる。しかし、街区型キャンパスは都市に溶け込み、新たなキャンパスの在り方を示している。

完全開放型では街区型が最も多く、複数の街区にまたがることで公共道路や公共空間を内包し、学外者の自然なアクセスを促している。一方、ビル型キャンパスは低層部に公共空間や緑地を設けるが、その不足が課題となっている。

3.空間デザインを通じた大学キャンパスの開放性分析

表3 完全開放型対象キャンパス一覧

3.1 キャンパス境界部の開放性

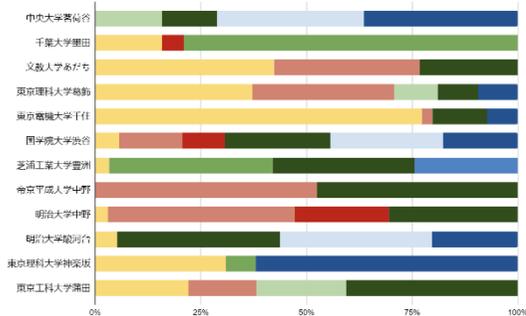
No.	大学	キャンパス	開設時期	土地面積 (ha)	調体計画	形態の分類	優待区域
i	中央大学	茗荷谷キャンパス	2023	0.2	茗荷谷駅前地区地区計画	ビル型	茗荷谷駅
j	千代田大学	豊田キャンパス	2021	0.1	文京区豊田地区計画	ビル型	小村井駅
l	文芸大学	足立キャンパス	2021	3.3	尾花エリアデザイン計画	大規模型	谷塚駅
b	明治大学	中野キャンパス	2013	1.7	中野西丁目地区地区計画	ビル型	中野駅
c	金沢学院大学	兼府キャンパス	2013	5.8	金沢駅前周辺地区まちづくりプラン大規模型	金沢駅	
f	専成平成大学	中野キャンパス	2013	0.9	中野西丁目地区地区計画	ビル型	中野駅
h	東京電機大学	東京千住キャンパス	2012	4	千住旭町地区計画	街区型	北千住駅
e	東京工科大学	蒲田キャンパス	2010	2.7	/	大規模型	蒲田駅
d	獨学院大学	渋谷キャンパス	2009	2.5	/	大規模型	渋谷駅
o	芝浦工業大学	豊洲キャンパス	2006	3	/	街区型	豊洲駅
f	東京理科大学	神楽坂キャンパス	2004	1.8	/	街区型	神楽坂駅
a	明治大学	駿河台キャンパス	1998	3.6	神田駿河台一丁目西側地区計画	街区型	御茶ノ水駅

視認性の高低と遮蔽物の高さに基づき、キャンパスの境界空間は以下の9つのタイプに分類される。

表4 境界開放度の基準

敷地境界の状況	視認性		
	高	中	低
	・遮蔽物がない ・見通しの良い植栽	・植栽の遮蔽 ・見通しの良い建築	・境界を通さない遮蔽物 ・密度の高い植栽 ・建築の裏側
遮蔽物の高さ	低 約100cm以下	中 約100~180cm	高 約180cm以上
	1-a	2-a	3-a
	1-b	2-b	3-b
	1-c	2-c	3-c

図2 各キャンパスの境界開放度

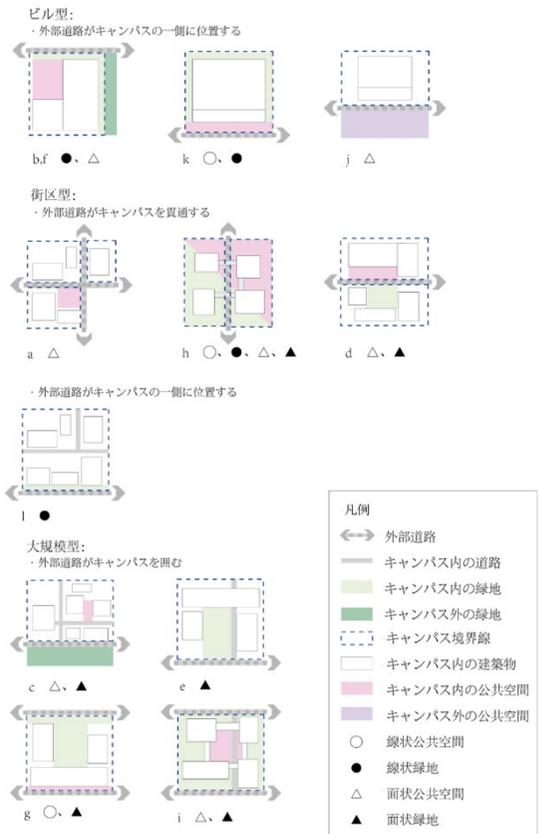


キャンパスの境界形式は、その立地条件や周辺環境によって大きく影響を受ける。高度に封閉された境界は、主に交通量の多い幹線道路沿いに見られ、一方で透過性の高い境界は、交通量が少なく歩行者中心の地域に多く分布している。また、キャンパス周辺の歩行空間と接続されたエリアでは、より開放的な境界が形成され、歩行者が利用しやすい統一された歩行システムが整備されている。

さらに、接道デザインにおける幅広の歩道や植栽の設置は、キャンパスの開放性を高めるだけでなく、官民境界を滑らかに移行させる重要な役割を果たしている。このようなデザインは、キャンパスと市街地の間でバリアフリーかつ連続性のある空間を提供し、地域社会との共生を促進することが期待される。

3.2 キャンパス内開放空間デザインの特性

図3 道路とキャンパス内の開放空間の空間構成



ビル型キャンパスは線状の公共空間や緑地を主としながらも、周囲の大規模な緑地、公園、広場などと非常に結びつきやすいことがわかる。

街区型キャンパスでは、外部道路に近い空間が大規模な面的公共空間や緑地を形成しやすく、良好なアクセス性を持っている。

大規模型キャンパスは、キャンパス建築物に囲まれた内部区域で、大面積の面的公共空間や緑地を形成する傾向がある。

都市型の大学では連続的な景観緑地が多く見られる一方、近郊型のキャンパスでは広大な活動緑地がより多く提供される傾向がある。

新しい大学キャンパスの設計では柔軟な境界がより重視されており、キャンパスと公共空間が周囲の自然と一体化する傾向があることがわかる。本章では、空間デザインの戦略という視点から、対象キャンパスを一つ一つ分析していく。

3.3 完全開放型キャンパスのデザイン戦略

完全開放型キャンパスは、改修・新築・二期プロジェクトなど多様な開発形態を持ち、規模や立地条件に応じて以下の3つのデザイン戦略が採用されている。

キャンパスと周辺公共空間の一体化の形成
開放的な公共空間を整備し、都市との連携を強化し、快適な歩行環境を提供する。

街区の雰囲気形成と維持 閉鎖的な空間を屋外空間に転換し、道路両側に開放空間と快適な歩き体験を提供、開放感を生み出す工夫が求められる。

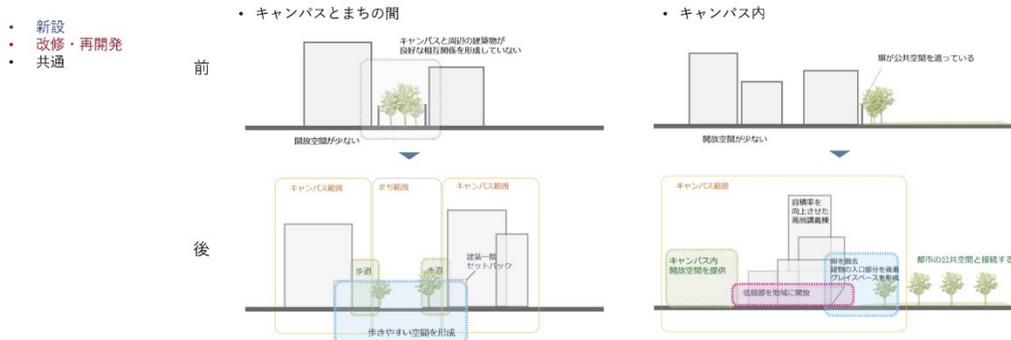
複合機能の空間施設を形成 (食堂・カフェなど) により、地域住民や学外利用者との交流を促進する。



図4 キャンパスのデザイン戦略分析の一例
東京都区部の完全開放型キャンパスでは、これらの戦略が基本的に採用されており、大学キャンパスの空間デザインが地域社会や都市環境と融合する役割を果たしていることが明らかになった。

図5 デザイン戦略運用のまとめ

目標	街区型	大規模型	ビル型
キャンパスと周辺公共空間の一体化の形成	<ul style="list-style-type: none"> 低層部機能の地域開放 	<ul style="list-style-type: none"> 周辺の開放空地や公園との融合 	<ul style="list-style-type: none"> 低層空間の外部化 低層部機能の地域開放 周辺の開放空地や公園との融合
街区の雰囲気形成と維持	<ul style="list-style-type: none"> 道路両側に開放空間と快適な歩き体験を提供 公共空間のデザインに歴史的要素を取り入れる 	<ul style="list-style-type: none"> キャンパス中心広場の整備 明確なゾーニングによる地域機能の集約 	<ul style="list-style-type: none"> ビル型キャンパスの間に快適な歩行道路を形成 公共空間のデザインに歴史的要素を取り入れる
複合機能の空間施設を形成	<ul style="list-style-type: none"> 低層部機能の地域開放 	<ul style="list-style-type: none"> 低層部機能の地域開放 	<ul style="list-style-type: none"> 大学施設と地域公共施設の複合利用



3.4 学外者の利用実態

対象キャンパスの選定にあたり、過去の調査がある東京理科大学葛飾キャンパスと芝浦工業大学豊洲キャンパスを含め、新設されたキャンパスの開設時間や空間特性を考慮した。また、典型的なビル型および大規模型キャンパスを対象とし、特に文教大学は大規模型でありながら一定程度街区型の特性を併せ持つ点が注目された。さらに、中野校区に位置する2つの大学は、公園に隣接している特性とビル型の空間構成を同時に備えているため、本研究において重点的に分析対象とした。

図6 文教大学あだちキャンパスの学外利用者ルート

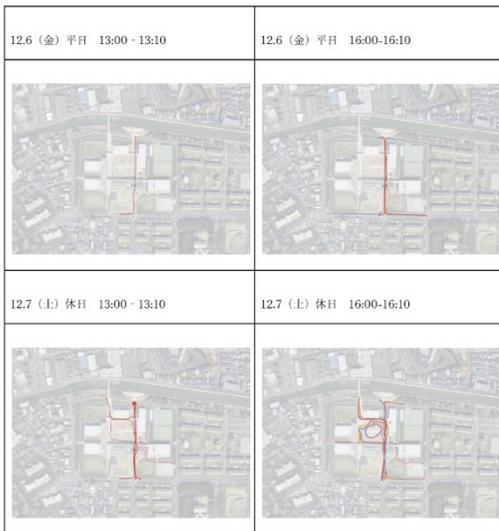


図7 明治大学中野キャンパスの学外利用者ルート



1) 文教大学における外部利用者の空間利用状況は、計画上のゾーニングと概ね一致しており、住民は東側のエリアでの活動を好む一方、学生は西側の教学区域に集中していることが確認された。観察結果によると、休息日の活動人数は平日に比べて多く、また、夕方の活動人数は昼間よりも多い傾向が見られた。これは、休息日に学校が社会連携講座などの活動を実施することが影響している可能性がある。さらに、夕方には帰宅途中の住民がキャンパス空間を通過する傾向があることも観察された。

2) 中野地区にある2つの大学では、住民の主な活動は通行が中心であり、その中でも多くの人々が明治大学中野キャンパスの広場を利用して犬の散歩や保育、関連する交流活動を行っていることが確認された。観察結果によると、夕方の利用者数は昼間の利用者数を上回る傾向が見られた。

調査結果には一定の偶然性が含まれる可能性があるものの、多くの住民は授業や特定の用事を目的としてキャンパスを訪れるのではなく、広場や空地を何気なく利用していることが分かった。このような利用は、キャンパスが都市空間の一部として機能し、都市の活力を喚起する助けとなっている。また、計画段階で追加された道路は、歩行ネットワーク全体の一部として住民の通行の選択肢を増やし、キャンパス空間が安全な印象を与えることで、保育や子どもを連れての遊び場としての利用可能性も高めている。

4. エリア再開発と社会文化交流における開放的な大学キャンパスの調整役としての役割

第四章では、中野区と足立区のエリア事例を対象として、地域再開発と社会活性化における大学キャンパスの役割について考察を行った。特に、大学キャンパスが地域社会に対してどのように開放性を高め、地域との一体化を実現しているかを検討した。

中野区では地域経済と都市機能の活性化が重視されており、都市イメージを向上するためオ



フィスエリアや公共空間を通じた多様な人々の交流が促進されている。一方、足立区では教育資源の不足を補いながら、長期間に住民との密接な連携を図ることで地域全体の社会的価値を高める取

り組みが行われている。

結論として、大学キャンパスの開放性を高めることは、地域再開発や社会文化交流において重要な調整役を果たし、都市と地域社会の持続可能な発展に寄与する可能性があるといえる。

5. 結論

本研究では、大学キャンパスの開放性が地域社会や都市環境に与える影響について多角的に分析を行い、キャンパスが果たす役割を明らかにした。特に、物理的空間デザインや公共空間の活用を通じて、大学が地域社会とのつながりを強化し、都市空間の一部として機能する可能性を示した点が本研究の重要な成果である。

大学キャンパスの開放性は、柔軟な境界設計や公共空間の配置によって、学外利用者や地域住民との交流を促進し、都市との一体感を生み出す鍵となる。また、空間デザインが意図しない滞留行動や新たな活動を誘発し、大学が地域の活性化に寄与する場として再定義されることも確認された。

さらに、本研究は、大学キャンパスが単なる教育・研究の場を超えて、地域社会と都市の持続可能な発展を支える設計指針を提供する潜在力を持つことを示した。これにより、大学と地域社会の相互関係を深め、公共空間の新たな価値を創出する可能性を探ることができた。

本研究では、研究範囲を東京都区部に限定しており、他地域における優れた事例については十分に検討されていない。また、完全開放型ではないキャンパスであっても、継続的な整備戦略を通じて新たなキャンパス空間を形成するという興味深い側面についても、本研究では取り上げていない。

今後、東京都区部の大学キャンパスの新設や移転は徐々に落ち着くと予想されるが、既存のキャンパスにおいても長期的な再整備計画が進められている事例が少なくない。将来的には、空間的および社会文化的な開放性を備えたキャンパス空間がさらに増え、大学キャンパスは都市における役割を一層発揮していくことが期待される。

参考文献

1) 小林剛士, & 鳩心治. (2009). キャンパス周辺土地利用変遷と居住地満足度に関する一考察. 日本建築学会技術報告集, 15(29), 245-250.
<https://doi.org/10.3130/aijt.15.245>

- 2) 小篠隆生, 小松尚, & 鶴崎直樹. (2012). 大学周辺地区における地域まちづくり主体と大学の連携による空間マネジメント. 日本建築学会計画系論文集, 77(679), 2127-2136.
<https://doi.org/10.3130/aija.77.2127>
- 3) 山崎新太, 北原寛司, 美樹是永, & 八木幸二. (2009). ボローニャにおける分散した大学敷地と公共外部空間が形成する大学街の特性. 日本建築学会計画系論文集, 74(645), 2415-2423.
<https://doi.org/10.3130/aija.74.2415>
- 4) 李彰浩. (2006). 大学が主体となる大学まち再生に関する研究: 米国におけるペンシルベニア大学とその周辺地域を事例として. 日本建築学会計画系論文集, 71(603), 131-138.
https://doi.org/10.3130/aija.71.131_1
- 5) 李彰浩, 後藤春彦, & 三宅論. (2001). 大学周辺地域の衰退とまちづくり活動の展開: 早稲田大学「西早稲田キャンパス」と周辺地域を事例として. 日本建築学会計画系論文集, 66(542), 175-182.
https://doi.org/10.3130/aija.66.175_2
- 6) 石光紀興, & 許京松. (2004). 大学移転に伴う周辺地域の変遷に関する研究: 大学周辺地域のまちづくりについて. 日本建築学会計画系論文集, 69(575), 93-100. https://doi.org/10.3130/aija.69.93_1
- 7) 岩崎克也, 塚田幹夫, 渡部裕樹. (2022). 公園や文化施設と融合した東京理科大学葛飾キャンパスのデザインプロセス. 日本建築学会技術報告集, 28(70), 1396-1401. <https://doi.org/10.3130/aijt.28.1396>
- 8) Leila Ayoub, 小林英嗣. (2001). 建築的文脈における「開放性」の概念に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 66(546), 305-313.
https://doi.org/10.3130/aija.66.305_2
- 9) 安森 亮雄, 江連 寛二, & 松浦 達也. (2018). 多目的のコモンスペースを中心とする空間接続からみたキャンパス建築の公開性. 日本建築学会計画系論文集, 83(747), 833-842.
<https://doi.org/10.3130/aija.83.833>
- 10) 二宮 彩, ほか 5 名. (2019). 地域に開かれた大学キャンパスの人の行動軌跡に関する研究. 日本建築学会大会学術講演梗概集 E2, 537-538.
- 11) 文部科学省. (2005). 我が国の高等教育の将来像 (答申). 中央教育審議会.
- 12) 岩崎 克也. (2018). 未来を拓くキャンパスのデザイン. 彰国社, 116-137.
- 13) 三宅 論, ほか 4 名. (2000). 早稲田大学西早稲田キャンパス整備指針の特徴. 日本建築学会技術報告集, 10, 209-214.